

2026年5月15日

## 戦後 80 周年とロシアの対日「歴史戦」

研究員  
河西 陽平

### 問題意識

本稿の目的は、ロシア連邦が第二次世界大戦終結から 80 周年という節目をどのように迎えたのかを概観することにあるが、そのなかでも「軍国主義日本」に対する勝利<sup>1</sup>に関連してどのような動きがロシア国内で見られたか、日本に対する歴史認識に何らかの変化は見られたか、そしてロシアによる対日「歴史戦」が今後どのように展開されるか、について触れてみたい。

ウクライナへの侵攻から一年を経た 2023 年 8 月 8 日、ロシアでは 16～18 歳の青少年を対象とする初の国定教科書が導入された<sup>2</sup>が、そのうちの一冊である『世界の歴史 1914-1945』を見ると、日本の歴史研究の世界では既に偽書であることが常識となっている「田中上奏文(田中メモランダム)」が、日本の対外政策の基調であるとの主張が明記されている<sup>3</sup>。こうした見方はロシア国防省の公刊戦史や対外情報庁編纂の資料集においても共有されており、「日本＝壮大な侵略計画に基づいて大陸進出した謀略国家」であるとの見方が定着している。

また、近年のプーチン政権下におけるロシア人の対日認識について、興味深い数字がある。独立系世論調査機関のレヴァダセンターが昨年 6 月 5 日に発表したところによれば、「全体的に日本のことをどう思うか」という質問に対して、「とても悪い」との回答が 21% (昨年 5 月) であり、一昨年の 8% から約三倍近く増加していることが確認された<sup>4</sup>。対日感情に対するこの調査はソ連崩壊直前の 1990 年 5 月から行われてきたが、ここまで日本への悪感情が増大した理由は判然としない。おそらく、考えられる要因としては、ロシア・ウクライナ戦争において「非友好国」認定された日本が現在に至るもなおウクライナ支援の立場を示していることへの反発、あるいは第二次世界大戦の勝利 80 周年を記念して実施された様々な行事、国営放送による歴史番組などといったメディアがロシア国内の歴史的に保守的な立場の層に影響を及ぼしたことが挙げられよう。

### 1. 対日参戦の重要視・正当化

まず広島に原爆が投下された 2025 年 8 月 6 日、ロシア外務省の月刊誌『国際生活』のホームページで、歴史学者アナトリー・コーシキン氏の新刊『日本の降伏：原爆かソ連の電撃戦か』の出版イベントに関する記事が公開された<sup>5</sup>。ロシア東洋大学教授で日ソ関係史を専門とするコーシキン氏は、報道関係者を前に、米国や日本のプロパガンダによって、海外の大部分の人々だけでなくロシア国民の間に「日本は広島、長崎への原爆投下の結果降伏した」との印象が広まっているが、日

本の降伏を決定したのはソ連の対日参戦であることを主張した。この主張自体は氏が過去の著作でも繰り返してきたものであるが、単なるプロパガンダではなく、歴史研究では説得力を有するものである<sup>6</sup>。同人は、昭和20年8月17日に昭和天皇が発した「陸海軍人に賜りたる勅語」においては原爆とその被害については言及されておらず、ソ連の対日参戦によって日本は武器を捨てざるをえなかったと記されていることに言及した。

この日から8月9日にかけて、東京の駐日ロシア大使館はSNS(X, Facebook)上で広島・長崎に対する米国の原爆投下を非難し、ソ連の対日参戦を正当化するポストを連続して投稿した<sup>7</sup>が、一貫した主張は「日本を降伏させ、第二次世界大戦を終結させたのはソ連である」というもので、日本に対する軍事行動を起こすにあたって、当時有効であった日ソ中立条約を一方的に破棄した件については触れられておらず、日本人のSNSユーザーからは批判のコメントが相次ぐことになった。

8月9日には国営のノーボスチ通信がソ連の対日参戦に関する特集記事を公開したが、そこに記されている内容は従来ロシア側が主張しているものと大きな変化はなく、①日本は長い間ソ連極東部を占領する計画をもっており、独ソ戦況の推移によってはソ連を攻撃するつもりでいた、②8月15日に行われた無条件降伏に関する昭和天皇の玉音放送は軍隊に対する戦闘停止命令ではなかったため、ソ連軍最高総司令部は極東ソ連軍最高司令官に対し、日本軍が武装解除して捕虜となって初めて軍事行動を完了する旨を発令した、③日本の敗戦は極東におけるソ連の安全を保障し、第二次世界大戦の終結を促進したというものであった<sup>8</sup>。

一方、8月12日から日本のポツダム宣言受諾日である同月15日にかけては、ウクライナに対する軍事侵攻において協力関係にあるロシアと北朝鮮の間で、対日戦勝80周年を盛大に祝福する動きが見られた。

記念式典に先立つ12日、プーチン大統領は金正恩総書記との電話会談において、日本の植民地統治からの解放80周年を祝福した。その後、両者は2024年6月19日に平壤で調印された「包括的戦略パートナーシップ条約」に基づいてパートナーシップの今後の強化を確認し合った。

13日ヴァチスラフ・ヴォロディン下院議長率いるロシア代表団が平壤に到着、15日の記念行事に出席した。日本からの解放を祝うだけでなく、ウクライナ戦争における中ロ二国の共闘をアピールした。式典当日の15日には、メドヴェージェフ安全保障会議副議長も金正恩宛に朝鮮半島の日本からの解放を祝福する電報を送っており、西側諸国による「新植民地主義的（米国をはじめとする西側諸国がつくったルールを自分達に押しつけようとしているという考え方）」アプローチに共同で抵抗したい旨を表明したのであった<sup>9</sup>。

また8月16日にはハバロフスクで「第二次世界大戦最後の一斉射撃」と題する展示会が開催されている。このイベントは、ハバロフスク地方国立公文書館が二年間の準備期間を経て開催したもので、ロシア連邦公文書館やロシア国防省に所蔵された史料などを一般公開したものであり、史料のなかにはサハリン歴史公文書館やロシア連邦保安庁(FSB)ハバロフスク支局、中国黒竜江省档案馆に所蔵されたものがあるという<sup>10</sup>。

ちなみに、このイベントの開催に伴って「第二次世界大戦最後の一斉射撃」というタイトルの史料集も刊行されている。同書では終戦時の日ソ戦に至る経緯、作戦戦闘の経緯、日本の降伏文書調印、東京裁判およびハバロフスク裁判について触れられているが、ロシア語と中国語で併記されている<sup>11</sup>のが特徴的であり、ロシアと中国で統一した対日歴史認識を形成しようという試みの一環であると考えられる。

## 2.情報機関による史料の開示

次に、対日戦勝 80 周年を迎えるにあたってロシアの情報機関が果たした役割について触れてみたい。ロシアでは 2020 年 1 月 1 日から、ナチスドイツと軍国主義日本の戦争犯罪を非難し、記憶を継承するための国家プロジェクト「時効なし」が開始されており<sup>12</sup>、2021 年 9 月 6 日から 7 日にかけて、人体実験に関与した旧関東軍防疫給水部（731 部隊）の人道に対する犯罪を糾弾する「ハバロフスク裁判フォーラム」という国際学術会議を開催している<sup>13</sup>。

注目すべきは、このようなプロジェクトやフォーラムの開催にあたって、FSB やロシア対外情報庁（SVR）といった情報機関が積極的に史料を提供し、戦前・戦時中における日本の対ソ侵略性を声高にアピールする動きに一役買っていることである。

ソ連内務省による 731 部隊や関東軍将校らの尋問記録について、ロシアでは毎年 8 月になるとインターネット上のニュース記事で発表することが多かったが、対日戦勝 80 年の節目となる昨年 8 月 19 日に FSB は公式ホームページに「対ソ細菌戦への日本の準備について」と題する特集記事を公開した<sup>14</sup>。今回公開されたのは合わせて三点だが、1947 年から 48 年にかけてハバロフスクやチタで行われた 731 部隊関係者の尋問調書であり、初めて機密解除されたものと見られる。

もっとも、記事の本文には疑問を感じる部分がある。たとえば、1939 年 5 月から 9 月にかけて満洲国とモンゴル人民共和国の国境紛争が拡大したノモンハン事件当時、「関東軍が撤退する際に 731 部隊の隊員がソ連・モンゴル軍兵士たちに感染させる目的で、ハルハ河に腸チフス菌を散布した<sup>15</sup>」という記述について、確かに戦場への給水活動がひと段落した 9 月に 731 部隊が、ソ連側の給水源であるハルハ河支流のホルステイン河に腸チフス菌などを散布した事実はあるが、ソ連軍に感染させるというよりは「(細菌戦の) 実行可能性を見るための試行といったレベルのものだった<sup>16</sup>」というのが、日本側の先行研究から明らかになっている。したがって、ノモンハン事件の際に 731 部隊がソ連軍に対して大々的に細菌攻撃を実行しようとしたとするロシア側の主張は、事実を歪曲したものだといえる。

FSB は 731 部隊に関する機密解除史料を公開し、駐日ロシア大使館のアカウントを通じて、戦前・戦時中の日本の対ソ侵略性を SNS 空間上に拡散するという手法を長く採用してきた<sup>17</sup>。一方で SVR は、戦前・戦時中の日本に関するソ連側の諜報活動に関する史料を大々的に公開し、対日戦勝に際して情報機関がいかに大きな役割を果たしたかをアピールする動きを見せた。

昨年 8 月 27 日、SVR 長官のセルゲイ・ナルイシキンが会長を務めるロシア歴史協会は、公式ホームページで「第二次世界大戦における軍国主義日本の行動」に関する史料 184 点を公開した<sup>18</sup>。今回発表されたのは、ソ連の内務人民委員部（NKVD）あるいは国家保安人民委員部（NKGB）の在外諜報員が 1940 年から 45 年にかけて、日本の対ソ動向についてモスクワに報告した電報類であるが、「第二次世界大戦の～」というタイトルが付けられている一方で、公開された史料の半数以上は 1941 年のもので、43 年から 44 年にかけてのものはほとんど収録されていない。

また、ロシア国内で既に公開された諜報活動関係の史料集に収録されている文書もいくつか含まれていることから、全ての史料が今回新たに公開されたというわけではない。文書を見てみると、概して独ソ開戦後の日本の対外動向に関するものが多く、日本が南方に進出するのか、あるいはソ連に対して軍事行動を開始するつもりなのかという点について、ソ連側が強く警戒していたこと、日本の内情について詳細な情報を入手していたことを広く国内外に知らせようとする思惑がうか

がえる。もっとも、在外の諜報員たちが収集・報告した情報の質は様々であるため、精査を要するものも少なくない。ロシア歴史協会はその後、9月17日に「ロシア対外情報庁アーカイブからの文書類（1939-45年）」と題し、第二次世界大戦中のソ連の諜報機関による電報史料800点以上を公開している<sup>19</sup>。

これに先立つ9月3日に、ロシア国防省がマルチメディアプロジェクト「ドイツ帝国に続く日本の滅亡」を立ち上げている<sup>20</sup>ことを鑑みると、各々の武力省庁（ロシア語では「シロヴィキ」と呼称される）が、対日戦勝において自らが果たした役割を競い合うように発表している様子が分かる。

### 3. 第二次世界大戦の起源に関する認識の相違

第二次世界大戦における戦勝80周年を記念して、ロシアでは武力省庁や歴史協会といった団体によって様々な情報公開が行われたことは述べたが、並行して一般国民向けの行事も各地で頻繁に開催された。

そのうちのひとつである「第二次世界大戦最後の戦い」はモスクワのロシア現代史美術館で催された展示会（昨年8月28日から11月23日にかけて開催）であり、対日戦勝80周年を記念した行事としては規模が大きく、SVR長官のナルイシキンが開会の挨拶に登場したことで話題を呼んだ<sup>21</sup>。

また開会の際、イリーナ・ヴェリカノヴァ館長は、この展示会によって「若い世代の人々の関心を惹きつけることが不可欠である」とし、若者たちが強く反応し、感情を揺さぶられるような戦場の様子の絵画を展示するなどの工夫をしていると発言した<sup>22</sup>。

この展示会は、ソ連の対日参戦から関東軍の壊滅までの「日ソ戦争」の経緯と実相、結果についてのものではあるが「ソ連の参戦によって日本を降伏に導いた」という従来からのロシアの主張に加えて「ソ連の参戦によって朝鮮、中国の人民は日本軍国主義の軛から解放された」というメッセージ性のより強いものとなっている。

そうしたなか、開会の挨拶においてナルイシキンは「第二次世界大戦は日本の侵略から始まった」という発言をしたことが注目を浴びた。ナルイシキンは次のように述べている。「強調したいのは、第二次世界大戦は極東で始まったということだ。ドイツによるオーストリア併合、西側諸国の犯罪的妥協によるチェコスロヴァキアの残酷な分割、ヒトラーのドイツ国防軍がポーランドに侵攻するよりはるか以前に始まったのだ。既に1938年までに、極東、特に中国における日本の侵略の犠牲者は100万人に達していた。ソ連は日本の軍国主義とドイツのナチズムに対して最初に戦った国の一つだ。ソ連こそが、極東において侵略者に最後の決定的な打撃を与えたのである<sup>23</sup>」と。

第二次世界大戦について、2023年8月に導入された初の国定歴史教科書では、英仏両国がアドルフ・ヒトラーに宥和的な態度をとった結果、チェコスロヴァキアをドイツに割譲した1938年のミュンヘン協定がその起源とされている<sup>24</sup>。一方で、2024年にロシア科学・高等教育省が、歴史専攻以外の学生たちに向けて刊行した教科書『ロシアの歴史』には、第二次世界大戦の始まりは、1939年9月1日のドイツのポーランド侵攻と記載されている<sup>25</sup>。

このように、ロシア国内では戦争の起源について認識の一致が見られていないわけだが、今回のナルイシキンの発言は、ソ連時代から現在に至るまで存在しないものである。彼の発言を読むと、1937年の盧溝橋事件に端を発する日中戦争が第二次世界大戦の始まりであり、先に中国国民政府軍（当時）に対して攻撃を仕掛けたのは日本であると主張していることが分かる。

ナルイシキンの発言は、軍国主義日本の打倒において中国と共闘したことを強調するためのものだと考えられるが、37年当時の日中戦争は二国間の軍事衝突にすぎない。また、同年8月21日に締結された中ソ不可侵条約に基づいて、ソ連は国民政府軍に多大な軍事支援を行い、志願兵から構成される空軍による援助も行ったが、あくまで非公式的なものであった。したがって、37年の時点で日中戦争を「第二次世界大戦の始まり」と形容するナルイシキンの発言には疑問を呈せざるを得ない<sup>26</sup>。

#### 4. ロシア外務省の対日強硬姿勢

この他に注目すべきは、戦後80周年を迎えるにあたってロシア外務省が発表した年次報告書である。8月29日に外務省の公式ホームページに掲載された本報告書は「ナチズムの賛美に関する状況、ネオナチズムの蔓延および現代のレイシズム、人種差別、外国人排斥、これらに関する不寛容のエスカレーションを促すその他の慣行の蔓延について」というタイトルで、1571頁にもおよぶ長大なものである<sup>27</sup>が、主張はおおよそ以下の二点にまとめられる。

第一に、諸外国により第二次世界大戦の歴史を歪曲することは許さない、すなわちロシア政府が発表している「正しい歴史」に外国が異議を唱えることは認められないということである。

第二に、現在ウクライナを支援している諸外国はナチズムに加担しているということである。ロシア政府の立場によれば、「特別軍事作戦」の目的は、ウクライナの非ナチ化、非軍事化、そしてドンバス地方のロシア系住民の保護であり、ウクライナの側に立つ諸国家は全てナチズムを賛美しているというものだ。こうした主張は、ウクライナを「ネオナチ国家」と認識する誤った前提に立ったものであり、事実とは異なるものである。

年次報告書では日本に対する厳しい批判もなされているが、その主張は以下四点に集約される。

第一に、日本は一貫して歴史改竄政策をとりつづけてきており、国内でネオナチズムとナチズムが美化されている。

第二に、東南アジアおよび太平洋における侵略的拡張政策を正当化しようとする報復主義的な傾向が顕著になっている。

第三に、広島および長崎の原爆投下記念式典では米国に対する責任を追及しようとする声が聞かれない一方で、ソ連の対日参戦についてはメディアが作為的に誇示しており、日本には第二次世界大戦の結果をどうしても認めたくないという思いが根付いている。

そして第四に、「特別軍事作戦」開始後、政治、報道、専門家の間で前例のない「ルソフォビア・プロパガンダ・キャンペーン」が展開されており、ウクライナ当局を代表する人々のファシスト的発言、ロシア人に対するジェノサイドを呼びかけている声は無視されている、というものである。

第一、二点目に関して、確かに日本国内では歴史修正主義的な主張をなすものがあり、そうした論調の文献が出版されているのは事実である。しかしながら、これはロシア政府が主張するような一貫した歴史改竄政策と呼ぶには程遠いものであり、実態を誇張した主張である。

また第三点について、毎年行われる原爆投下の式典において、米国の名前が言及されないのは事実であるが、ソ連の対日参戦について日本の国内メディアが「作為的に誇示」しているというのは根拠のない印象論である。対日参戦が国内メディアによって批判的に報道されるケースは見られるが、それは当時まだ有効であった日ソ中立条約をソ連が一方的に破棄して日本に宣戦布告し、8月

15日の玉音放送後も軍事行動を継続、更に60万人もの軍属・民間人がシベリアに抑留されたという歴史的経緯を想起すれば、日本側が非難するのは至極当然のことといえよう。

第四点目についてだが、主権国家であるウクライナに対してロシアがとった行動は、国際法を無視した明らかな侵略行為であり、糾弾されてしかるべきものであるにもかかわらず、これを「ルソフobia・プロパガンダ・キャンペーン」すなわちロシア人に対する差別感情の煽動と解釈するのは無理がある。また、ウクライナ当局がロシア人に対するジェノサイドを呼びかけているという主張も根拠に欠けるものである。

## 5. 結論

シロヴィキ（国防省、連邦保安庁、対外情報庁）の強力な支持の下、ロシアは今後も「官製の歴史」の発布を続けることが予想される。歴史認識問題の対象は欧州だけでなく、これまで見てきたように、ひきつづき日本にも及ぶ。

現在のロシアでは外国の研究者との共同研究を行う際、連邦保安庁の許可を得なければならない状況にある。したがって歴史認識問題をテーマに日ロ両国の研究者が議論する場は限られ、ロシアにとって都合のよい、一方的な対日歴史認識が形成されることが予想される。

日本の対ソ侵略性、第二次世界大戦終結におけるソ連の対日参戦が果たした役割をアピールするための行事は例年になく頻繁に開催されているが、このことがロシア国内の保守派、対日問題にこれまで無関心であった層に強く影響を与えると考えられる。更に日本のウクライナ支援継続と相俟って、日本に対する悪感情が更に大きくなる恐れがある。

こうした歴史分野においてロシアが展開する「歴史戦」に対して、日本は手を打つことができていないのが残念ながら現状であると言わざるを得ない。

---

<sup>1</sup> 2023年6月20日、ロシア連邦議会下院は1945年9月3日を「第二次世界大戦終結の日」から「軍国主義日本への勝利と第二次世界大戦終結の日」と変更した。ロシア連邦議会下院（国家ドゥーマ）の公式ホームページによる。День Победы над милитаристской Японией и окончания Второй мировой войны будет отмечаться 3 сентября <http://duma.gov.ru/news/57344/>（2026年1月27日閲覧）

<sup>2</sup> ロシア軍事歴史協会のホームページによる。“В России представили новый учебник истории для 10-11-x классов” 8 августа 2023 года. <https://rvio.histf.ru/activities/news/v-rossii-predstavili-novyyj-uchebnik-istorii-dlya-10-11-h-klassov>（2026年1月27日閲覧）

- <sup>3</sup> 「日本の具体的な目的は、1927年に田中義一首相が天皇に提出したメモランダムの中にも規定されていた。“世界を征服するためには、我々はまず何よりも中国を支配しなければならない。中国の資源を掌握して、我々はインド、アナトリア、中央アジア、ヨーロッパの征服に移るのである”」 *В. Р. Мединский, А. О. Чубарьян, История Всеобщая История 1914-1945 годы. 10 класс. Базовый Уровень (Москва, 2023), стр. 131.*
- <sup>4</sup> レヴァダセンターの公式ホームページによる。Представления о дружественных и недружественных странах, взаимоотношениях с Западом, отношении к некоторым странам и направлениях заграничных поездок. <https://www.levada.ru/2025/06/05/predstavleniya-o-druzhestvennyh-i-nedruzhestvennyh-stranah-vzaimootnosheniyah-s-zapadom-otnoshenie-k-nekotorym-stranam-i-napravleniya-zagranichnyh-poezdok/> (2026年1月27日閲覧)
- <sup>5</sup> *Андрей Торин*, “Почему Япония капитулировала: история против политического мифотворчества,” *Международная Жизнь*, 6 Августа 2025 года. <https://interaffairs.ru/news/show/52490> (2026年1月27日閲覧)
- <sup>6</sup> コーシキン氏以外に同様の主張を行う研究者としては、たとえば長谷川毅が挙げられる。長谷川毅『暗闘スターリン、トルーマンと日本降伏 [新版]』(みすず書房、2023年)。
- <sup>7</sup> 広島原爆投下、対日参戦に関する駐日ロシア大使館のXにおけるポストとしては以下を参照。  
<https://x.com/RusEmbassyJ/status/1953049197831438659> (2026年1月27日閲覧)、  
<https://x.com/RusEmbassyJ/status/1954151661137477650> (2026年1月27日閲覧)
- <sup>8</sup> ノーボスチ通信の公式ホームページによる。“Маньчжурская стратегическая наступательная операция (1945),” *Риа Новости*, 9 Августа 2025 года. <https://ria.ru/20250809/voyna-2034261895.html> (2026年1月27日閲覧)
- <sup>9</sup> ロシア連邦議会下院 (国家ドゥーマ) の公式ホームページによる。Вячеслав Володин от имени Президента России поздравил руководство и народ Кореи с 80-летием Освобождения. <http://duma.gov.ru/news/61943/> (2026年1月27日閲覧)
- <sup>10</sup> *Алексей Лукьянов*, “Фотоальбом в честь 80-летия Победы над Японией презентовали в Хабаровске,” *Аргументы и Факты Хабаровск*, 16 Августа 2025 года. <https://hab.aif.ru/society/fotoalbum-v-chest-80-letiya-pobedy-nad-yaponiey-prezentovali-v-habarovske> (2026年1月29日閲覧)
- <sup>11</sup> “В Хабаровске прошла презентация книги "Последние залпы Второй мировой",” *AmurMedia*, 15 Августа 2025 года. <https://amurmedia.ru/news/2187705/> (2026年1月29日閲覧)
- <sup>12</sup> <https://xn--2020-k4dg3e.xn--p1ai/events/bez-sroka-davnosti/> (2026年1月29日閲覧)
- <sup>13</sup> ハバロフスク裁判フォーラムの意義と役割について述べた最新の論考としては、以下を参照。小林昭菜「歴史的書き換え」に対するプーチン政権の最近の動向——「ハバロフスク裁判」フォーラムと日ロ関係への影響から」日本国際問題研究所「大国間競争時代のロシア」研究報告 (令和3年度ロシア研究会) [https://www.jiia.or.jp/pdf/research/R03\\_Russia/05-kobayashi.pdf](https://www.jiia.or.jp/pdf/research/R03_Russia/05-kobayashi.pdf) (2026年1月26日閲覧)
- <sup>14</sup> FSB の公式ホームページによる。О Подготовке Японии К Бактериологической Войне Против Советского Союза. 19 Августа 2025 года. [http://www.fsb.ru/fsb/history/archival\\_material/japanbio.htm](http://www.fsb.ru/fsb/history/archival_material/japanbio.htm) (2026年1月29日閲覧)
- <sup>15</sup> Там же.
- <sup>16</sup> 常石敬一『七三一部隊 生物兵器犯罪の真実』(講談社現代新書、1995年) 139頁。また常石の最新の研究としては以下を参照。常石敬一『731部隊全史—石井機関と軍学官産共同体』(高文研、2022年)。
- <sup>17</sup> 731部隊とハバロフスク裁判に関する駐日ロシア大使館のXにおけるポストとしては以下を参照。  
<https://x.com/RusEmbassyJ/status/1958832133532979224> (2026年2月3日閲覧)  
<https://x.com/RusEmbassyJ/status/1960654572097298889> (2026年2月3日閲覧)
- <sup>18</sup> ロシア歴史協会の公式ホームページによる。 <https://historyrussia.org/sobytiya/arkhivnye-dokumenty-pomilitaristskoj-yaponii1-2.html> (2026年2月3日閲覧)
- <sup>19</sup> ロシア歴史協会の公式ホームページによる。 <https://historyrussia.org/sobytiya/dokumentalnye-materialy-1939-1945-iz-arkhiva-sluzhby-vneshnej-razvedki-rossijskoj-federatsii.html> (2026年2月3日閲覧)
- <sup>20</sup> *Антон Антонов*, “Минобороны запустило мультимедийный проект о победе над Японией в 1945 году,” *Взгляд*. 3 сентября 2025 года. <https://vz.ru/news/2025/9/3/1357101.html> (2026年2月3日閲覧)
- <sup>21</sup> ロシア歴史協会の公式ホームページによる。 <https://historyrussia.org/sobytiya/predsedatel-rio-otkryl-vystavku-posvyashchjonnuyu-zavershayushchemu-etapu-vtoroj-mirovoj-vojny.html> (2026年2月3日閲覧)
- <sup>22</sup> ロシア大統領文化イニシアティブ基金の公式ホームページによる。  
<https://xn--80aeeqaabljrdbg6a3ahhcl4ay9hsa.xn--p1ai/news/7073> (2026年2月3日閲覧)
- <sup>23</sup> タス通信の公式ホームページによる。“Нарышкин напомнил, что Вторая мировая война началась с агрессии Японии,” *ТАСС*. 28 августа 2025 года. <https://tass.ru/obschestvo/24891401> (2026年2月3日閲覧)
- <sup>24</sup> *В. Р. Мединский, А. В. Торкунов*, *История России 1914-1945 годы. 10 класс. Базовой Уровень (Москва, 2023)*, стр. 278-279.

<sup>25</sup> Ю. А. Петров, История России. Учебник для студентов неисторических специальностей. Наравление подготовки «Инженерное Дело» (Москва, 2024), стр. 340.

<sup>26</sup> 昨年9月3日から6日にかけてウラジオストクで開催された東方経済フォーラムにおいて、ロシア歴史協会の後援による「大祖国戦争と第二次世界大戦の教訓：偉大な勝利の80周年に向けて」という国際学術会議が開催されたが、そこでもナルイシキンは同様の発言をしている。ノーボスチ通信の公式ホームページによる。“Нарышкин рассказал о начале Второй мировой войны на Дальнем Востоке,” РИА Новости. 3 сентября 2025 года. <https://ria.ru/20250903/voyna-2039239168.html> (2026年2月10日閲覧)

<sup>27</sup> ロシア外務省の公式ホームページによる。О ситуации с героизацией нацизма, распространении неонацизма и других видов практики, которые способствуют эскалации современных форм расизма, расовой дискриминации, ксенофобии и связанной с ними нетерпимости (Доклад Министерства иностранных дел Российской Федерации, 2025 г.) [https://mid.ru/ru/foreign\\_policy/doklady/2043460/](https://mid.ru/ru/foreign_policy/doklady/2043460/) (2026年2月24日閲覧)